

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



第4回 永井隆平和記念・長崎賞授賞式



『なしむ』第10号

- Report 「第4回永井隆平和記念・長崎賞」
セミパラ巡回医療記
- People エヴゲニイ・デミチュック博士
鎌田 七男博士
高木 昌彦先生を偲んで
- Works 外務省補助事業
- Korea Report 韓国医師等受け入れ事業
- Information 新しい原研施設の紹介

Vol. 10
2002 SPRING

発行/平成14年 3月 29日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
(長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内)
TEL 095(823)4278 FAX 095(820)3037

Report

第4回 永井隆 平和記念・長崎賞

2月18日、今回で第4回を迎える「永井隆」平和記念・長崎賞を授与しました。

永井隆 平和記念・長崎賞

「永井隆」平和記念・長崎賞は、原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に隔年毎に送られます。

第4回「永井隆」平和記念・長崎賞の受賞者は、ベラルーシ保健省内分泌研究所のエヴゲニイ・デミチュック博士と(財)広島原爆被爆者援護事業団理事長の鎌田七男博士のお二方に決定しました。

授賞式は2月18日にホテルニュー長崎で行われ、井石会長から賞状と賞牌(ブロンズ像「生命のともじり」)が授与されました。

デミチュック博士は永年にわたりチェルノブイリ原発事故後の小児甲状腺がんの診断及び治療に尽力され、鎌田博士もまた、永年にわたり原爆被爆者における放射線誘発がん、特に白血病の発症機構の解明、治療に尽力されました。両博士の活動は、原発事故と原爆というそれぞれ異なる分野での活動ですが、いずれも国際的に活躍され、後世に残る重要な放射線医療分野への貢献者として、その業績は高い評価を受けておられます。

両博士の医療活動と研究の成果は、ヒバクシャ医療の分野はもとより、世界の平和に大きく貢献していることから、本賞の目的に最もふさわしいお二人として今回の授賞となりました。

授賞式には、長崎県知事、長崎市長をはじめ、ベラルーシ共和国などチェルノブイリ関連諸国からもたくさんの医療関係者が出席してくださいました。また、笹川保健協力財団からと広島県医師会からそれぞれの受賞者のお祝いに理事長、会長が駆けつけてくださり、授賞式後の祝賀会では、受賞者を囲んで和やかな歓談が続きました。



永井隆 (ながいたかし)
明治41年(1908)～昭和26年(1951)
医師、原爆作家/島根県松江市生まれ。

昭和7年(1932)長崎医科大学を卒業し助手として放射線医学を専攻した。満州事変に幹部候補生として出征し、帰還してカトリックの洗礼を受け森山緑と結婚。日中戦争に軍医中尉として中国各地に転戦し昭和15年(1940)帰還した。同年、長崎医科大学助教授・物理的療法科部長となるが白血病に冒され、昭和20年(1945)6月、余命3年と診断される。

同年8月9日爆心地から700m離れた同大学で勤務中原爆に遭い重傷を負う。この時出血がひどく、丘の上で同僚の外科の教授から手術してもらったが、麻酔なしの手術に顔色ひとつ変えない永井博士は実に神々しい気高い姿だったという。

手術後、永井博士は自ら先頭に立って多数の傷ついた人々のため救護活動に挺身した。8月9日妻・緑は、自宅の下敷きとなり逃げ出しきれず焼死した。子供2人は三ツ山の祖母の家に疎開中だったため無事だった。

翌昭和21年教授になったが白血病で倒れ、病床で原爆の手記を執筆し始める。これを「東京タイムズ」に発表して認められ、『ロザリオの鎖』『この子を残して』『生命の河』『長崎の鐘』『花咲く丘』『いとこ子よ』など数々の作品を書き、祈りと平和を訴え続けた。これら著作を読んで感動した多くの人達が見舞いのため博士を訪問した。天皇陛下のお見舞いを受けローマ教皇も特使を派遣し、昭和23年にはヘレン・ケラーも訪問した。長崎市名誉市民第1号に選ばれ国会でも表彰を受ける。松竹映画『長崎の鐘』(昭和25年)は博士の住まいであった「如己堂」で撮影されたもので、多くの国民に感動を与えた。昭和26年(1951)5月1日長崎大学医学部附属病院で骨髄性白血病により死去、5月14日に長崎市葬が行われた。

デミチュック博士紹介

受賞者
エヴゲニイ・デミチュック博士(76歳)
(ベラルーシ保健省放射線内分泌研究所甲状腺部門部長)
(ベラルーシ医学アカデミー会員)

- ・1925年1月2日 ミンスク(ベラルーシ共和国)にて生まれる。
- ・1958～1965 モギリョフ州立病院外科部長
- ・1966～1997 ミンスク州立甲状腺がんセンター所長
- ・1997～2001 放射線内分泌研究所甲状腺部門部長
- ・1992 チェルノブイリ原発事故後、小児甲状腺がん患者の激増を世界で初めて科学誌「Nature」に報告
- ・1996 小児甲状腺がん患者における放射線外科治療技術の開発と導入
- ・1998 誘発甲状腺がんの予防的頸部リンパ節切除の必要性の立証

鎌田博士紹介

受賞者
鎌田 七男博士(64歳)
(財)広島原爆被爆者援護事業団理事長)

- ・1937年3月20日生まれ
- ・1970年7月 医学博士号取得
- ・1962～1976 広島大学原爆放射能医学研究所臨床第一部門助手
- ・1985～2000 同 血液学研究部門教授
- ・1997～1999 同 所長
- ・2001～ (財)広島原爆被爆者援護事業団理事長
- ・1962～ 被爆者白血病の研究開始
- ・1969～ 放射線傷痕の持続性を証明
- ・1972～ 放射線後障害の明確化
- ・1988～ IPPNW(核戦争防止国際医師会議)日本支部理事として核廃絶に努力
- ・1992～1999 放射線被曝者医療国際協力推進協議会幹事長、会長歴任

第4回 永井隆平和記念・長崎賞 受賞者の横顔

受賞者のお二人は、長くヒバクシャ医療に貢献してこられました。ご苦労も多かったその道のりをほんの少しだけですが、お話いただきました。

デミチュック博士はチェルノブイリ原発事故の直後からベラルーシでの治療活動にたずさわってこれ、医療器機やスタッフも不足する中大変なご苦労があったことと思います。

一番印象に残ったことをおたずねすると「事故の時はまだ小さな子供だった男の子が、甲状腺がんを乗り越え、立派に成人して結婚、子供がうまれた事。自分の孫のような気がします。」と目を細められました。76才になられる今も、ベラルーシの子供達やその未来のために研究センターの設立のため、また医師達の教育や医療器機の充実のため「まだまだ引退はできないんだ」とおっしゃるデミチュック博士は、きっと子供達や若い医師からも慕われる先生なのでしょう。

ベラルーシでの治療活動にはやはり経済的な問題もあり困難な面も多いそうです。ナシムをはじめとする国際的な医療支援には大変感謝され、これからも人材・物資の両面からの支援が必要であることを訴えておられました。



祝賀会でのデミチュック博士(右)

鎌田博士は長崎や永井隆先生との所縁の深さについてお話を下さいました。鎌田博士の恩師は故永井隆博士を治療された朝長先生です。永井博士のお話を聞いておられたせいでしょうか、今回の受賞は感慨深いものがありました。

鎌田博士も広島で被爆者医療にたずさわるかたわら、核戦争防止国際医師会議や原爆被爆者への人道的援助など幅広く活動されています。長崎でもそうですが広島でも原爆被爆者の高齢化に伴って、医療面はもちろん彼等を精神的にサポートする必要があると鎌田博士はおっしゃいました。「生き残ったことで、自分を責め続ける人もいます。老人となつたいまだから、精神的な支えが要ります。」



祝賀会での鎌田博士(右)

治療や研究の中で出会った人々に対して、とても感謝しているという鎌田博士。「研究のためとはいえ、相手は生身の人間です。血液採取や辛い骨髄穿刺を長い間許してくれた方々のおかげで、今日の研究成果があります。彼らとは家族以上の信頼関係を築いてきたのです。」という言葉の中に、博士のお人柄が凝縮されていると感じました。

お二人はそれぞれの立場でヒバクシャ医療にたずさわってこられたのですが、デミチュック博士は子供達に対して、鎌田博士は高齢となってゆく被爆者に対して、常に誠意と情熱をもって接してこられました。またそうした姿勢や人間的な魅力がなければ人々との信頼関係は築けなかったと感じました。

受賞者のお二人は研究への情熱を失わない、とても魅力的な方でした。きっとお二人の周りからはヒバクシャ医療の未来を担う人材が多く育つのではないのでしょうか。

今後のご活躍をお祈りいたします。



セミパラ巡回医療記

セミパラチンスク
巡回医療記

日本赤十字社 長崎原爆病院
院長 田口 厚

カザフスタン共和国セミパラチンスク地区旧ソ連核実験被災者の健康と医療の実情を調査のため平成13年8月24日から2週間、現地に出張してきた。もともとこの事業は長崎大学原研の山下教授が3年前から行っていたチェルノブイリ原発事故の調査が一段落したこと、旧ソ連の秘密核実験都市で行われた地上・地下核実験で、その付近に住むカザフ族に広大な放射線障害が及んでいた事が判明しながらも、様々な事情から約10年間も放置されていたのを、同じ被爆地である長崎と広島でなんとか援助できないかという事で始まった事業である。山下教授も赤十字の参加を希望され、現地の実情を知り健康相談を受けてほしいとのナシムからの要請もあって、様々な不安材料を抱えながらも参加した。

カザフスタン共和国は、国全体としての医療レベルが低いわけではない。10年前の独立後に経済状態が悪化、医療器機の新規設備はほとんどが日本をはじめとした諸外国からの援助がたよりで、そのメンテナンスも十分できない状態であった。それよりも驚いたのは都市と地方の格差である。アルマトゥやセミパラチンスクといった都市にはホテルやスーパー、医科大学などもあったのだが、核実験地の周辺は村になると悲惨な現状である。500～5000人の集落が散在していて、10年前に舗装された一本道の道路と(電気と電話の)2本の電信柱が、広大な草原に延々と伸びる他は何もない。

ここで旧ソ連時代に核実験が行われたのだが、住民には何の通告もなく、彼らは近くでくり返しおこる爆発が何なのかも知らされないまま、広大な平原でのんびりと放牧を行っていたのである。

我々の一行が巡回したカイナールとカラウルの診療所も水は近くの池から手押し車で汲んでくるような状態。病院でもこれだから民家は推して知るべしである。

巡回健康診断では、小児甲状腺エコー、日本へ持ち帰ってホルモン測定をするための尿の採取、婦人科疾患診察、などを行った。私は整形外科的な診察と、総合調整役として実験地周囲の村落で巡回診療的なことを行った。私が担当した整形外科関係では、先天股脱、斜頸、内反足、大腿頸部骨折の放置例などが見られたが、その集団の母数が不明なこと、被曝線量が不明なこと、妊婦の栄養状態が悪いことなどで、放射線障害と断定できるデータはとれなかった。それよりも貧困と近くの医療機関が整っていないために、また設備の良い病院に通うのは遠すぎて無理であるために、治療すれば良くなるものもそのまま放置せざるをえない実情を実感した。カザフ最大の都市アルマトゥの2ヶ所の医療センターを視察し、日本から援助された医療器機の実情を見聞したが、試薬切れ、不安定な電圧のためのデータの信用性の低さと故障の頻発、機械操作の未熟などが目立ち、技術と人のさらなる援助が必要と痛感した。

平成13年8月24日から2週間にわたってNASHIMではセミパラチンスクでの住民の健康診断と実情調査のため、専門家による医療チームを派遣しました。



カイナール村の診療所にて

この巡回では、あちこちに残るロシアの文化遺産やカザフの習慣、豊富な食べ物などにも出会い、旧ソ連の核実験停止10周年記念式典に出席し、日本・ヒバクシャ・長崎の代表として献花を行った。また帰国前日に日本大使館の招待で日本・カザフの親善として改装なったコンサートホールで故団伊久磨作のオペラ『夕鶴』を特等席で観劇できるという幸運もあった。

この事業への参加を機に、今後日本赤十字社長崎原爆病院として、さいはての地セミパラの被害者に何ができるかを考えてみたい。



日本から援助された医療機器の使用状況を見聞



カイナール村の診療所にて

Report

高木 昌彦先生を偲んで

長崎大学医学部原研病理教授 関根 一郎

2002年3月21日、高木昌彦先生が大阪のご自宅で急逝された。76才。70才にして中央アジア・カザフの旧ソ連邦核実験地近くのセメイ市(セミパラチンスク)に下宿、自炊しながら、カザフ語を勉強、非核・平和を世界へ訴え続け、現地ヒバクシャの調査を企画され、いよいよスタートを切ろうとしていた矢先のことであった。「カザフは核保有国から非核の国に生まれ変わった。原爆被爆国の日本こそ非核を宣言し、その代表であるべき」とは、セメイで、またしばしば訪問いただいた長崎で何度も、何十回も先生からお聞きした先生の信念であった。

70才から学ばれたカザフ語で、ゆっくりゆっくり平和のメッセージを語られる先生の姿は、聖なる伝道者を思わせた。崇高な目標をしっかりと抱いて、みずみずしい心を持って、全力で生きる、それが青春。地平線に連なるセメイの町の道路を歩かれている先生の背中から、本当の若さとは何かを教えていただいた。

広島で被爆され、大阪の「被爆婦人の集い」のお世話をなされている奥様の静子さんによれば「いつものようにカザフの民族衣装の帽子を頭に、応接間でお客様に熱心に話をしている時に、突然発作がおきました」とのことであった。早すぎたことが悔やまれる。しかし何か先生らしい。先生はカザフの人達がいつでも見上げることができる星になられた。

高木昌彦先生のご略歴を紹介しつつ、先生のご冥福をお祈りする。

- 大正14年(1925年) ロサンゼルス生まれ
- 1才半より山口県由宇町に育つ
- 昭和20年 第六高等学校卒業
- 24年 大阪大学医学部卒業
- 公衆衛生学教室助手、講師など歴任
- 62年 大阪大学退職
- 平成 7年 9月よりカザフ在住
- 14年 3月21日ご逝去



カザフにて
左が高木昌彦先生

People

韓国から医師等を招聘

韓国からの医師等専門職の招聘人数は、ここ数年増加傾向にあるところですが、平成13年度は前年度と同じ4名を招聘しました。これまでと同様全員大韓赤十字社の職員で、韓国南部の慶尚南道居昌郡にある居昌赤十字病院の許 鎮哲(ホ ジンチョル)院長、同じく慶尚南道の陝川郡にある陝川原爆被害者福祉会館(日本の原爆被爆者養護ホームに相当)の李 丙鎔(イ ピョンヨン)館長と金 銀玉(キム ウンオク)物理治療師、それに在韓被爆者福祉事業を担当している大韓赤十字社特殊福祉事業所の尹 錫勳(ユン ソクフン)所長を長崎にお迎えして、11月26日から12月5日までの10日間と11月26日から30日までの5日間の2班に分かれて被爆者医療に関する研修・視察を行いました。

まず、原爆資料館の見学から始まり、行政側の県・市から原爆被爆者対策事業の概要についての説明や日赤長崎原爆病院で業務概要の説明を受けました。その後、恵の丘長崎原爆ホームや原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」の視察を行い、日本の被爆者とじかに接しました。

4人は、原爆の後障害に今も苦しんでいる様子を見て原爆の悲惨さを肌で感じるとともに、同じ原爆に遭った者として被爆者に国境のないことを痛感されたそうです。

尹 錫勳所長と李 丙鎔館長は視察を中心とした5日間の研修だったので、これで韓国へ帰られました。管理職員という立場で日本の原爆施設の運営実態をつぶさに視察してきわめて強い印象を受けられたようです。

許 鎮哲院長と金 銀玉さんは、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設で分子治療や放射線応答解析、放射線疫学、国際放射線保健の各研究分野(部門)で専門研修を受けられました。

また、医療の現場である日赤長崎原爆病院や長崎大学医学部附属病院で実地研修を受けた他、許 鎮哲院長は放射線影響研究所においても研修を受けられました。

2人とも医療従事者としての立場から被爆による精神的・肉体的後遺症などに関して熱心に質問をしていました。また日韓の医療関係者との相互理解がいちだんと高まったことを実感しました。

4人の帰国後のご活躍をおおいに期待いたしますとともに、NASHIMからも医師等を派遣して、被爆者の方々の健康診断や各種相談、医療従事者との情報交換、長崎での研修終了者のフォローアップなどを実施したいと考えています。

(原研施設長 朝長 万左男)



長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設にて

1 臨界前核実験

【りんかいまえかくじっけん】

プルトニウムなど核分裂性物質の連鎖反応が起きる「臨界」に達しないように量や温度などを管理して実施する核実験。

核爆発は、コンピューターシミュレーションで行う。

2 被ばく線量【ひばくせんりょう】

人体が放射線を浴びた場合、その強さにより障害の起こる内容が異なる。その評価の為に体が受けた放射線の強さを量(線量)としてあらわす場合に使われる。

シーベルという単位。

3 エコー

音響効果を利用して、体の表面から深部に到るまで異常の部位を探索する超音波診断装置のこと。エコーを用いて得られた画像で、甲状腺、乳腺、肝臓などの病気の診断に役立てる。

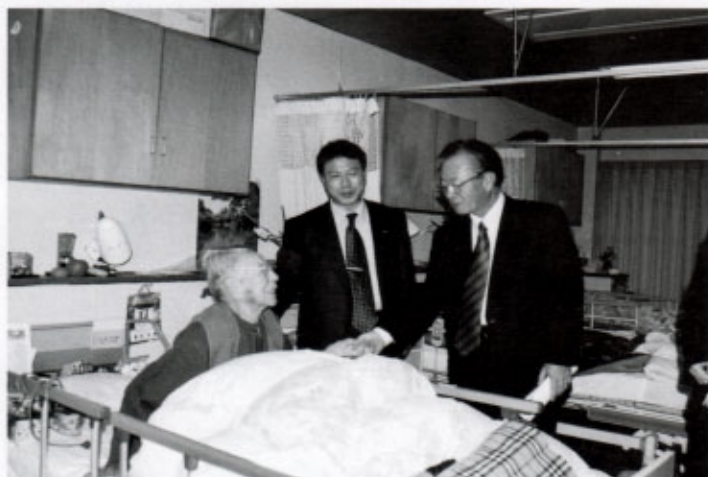
4 遺伝子治療【いでんしちりょう】

遺伝子の異常で起きる種々の病気(がんや先天異常など)を、その異常な遺伝子自身をターゲットに選択的に修復したり、削除したりする新しい期待されている治療法である。

分からない用語があればご質問下さい。素朴な疑問も大歓迎です。皆さんからの質問にもこのコーナーでお答えしたいと思っています。

長崎・ヒパクシャ医療国際協力会
E-mail info@nashim.org
FAX:095(820)3037

『なしむディクシヨナリー』宛お送り下さい。



原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」(西彼町)を訪問

外務省補助事業

NASHIMは、これまでも補助事業の枠内で、ミンスク医科大学(現ベラルーシ医科大学)との共同作業として、甲状腺のロシア語教科書である「甲状腺学:基礎編」を作成したほか(平成9年度)、セミパラチンスク核実験場に隣接するロシア連邦アルタイ州における超音波画像診断支援事業(平成10年度)、ミンスク医科大学における電子図書の整備事業(平成11年度)、モスクワ内分泌研究所への尿中ヨード測定に関する技術支援事業(平成12年度)といった内容で多大の貢献を行ってきました。

本年度の事業としては、以上のようなこれまでの実績を踏まえ、ロシア連邦オブニンスク放射線医学研究所及びベラルーシ医科大学との共同事業での医学教科書出版を行いました。チェルノブイリ原発事故から15年目を迎え、一体私たちが何を教訓としたかを反省し、ロシア語での二冊の教科書(甲状腺超音波診断:疾患編と小児甲状腺学)の出版を行いました。

前者は平成11年度の事業枠内で出版した「甲状腺カラーアトラス」の続編として出版されたもので、現地小児甲状腺がんの症例を中心に編集されています。執筆は前作と同じオブニンスク放射線医学研究所のウラジミール・パーシン教授(元長崎大学医学部客員教授)が担当し、医学部の山下俊一教授の校正を経て、現地モスクワで3000部が出版されました。今後、甲状腺がん診断レベルの向上につながる事が期待されています。

一方後者の「小児甲状腺学」(写真)は、ベラルーシ医科大学のアレクセイ・クバルコ教授と山下教授が編集を担当し、ドミトリー・ロマノフスキー副所長(写真)や高村昇講師を中心とした両大学のスタッフに加え、アメリカのピッツバーグ大学の医師らも執筆陣に加わりました。この教科書は長崎でロシア語印刷され、ベラルーシ共和国をはじめ、旧ソ連邦で内分泌学・放射線医学を学ぶ医学生に1000部が無料で配布されることになっています。

いずれも外務省や現地大使館でも大変好評であり、日本の顔の見える継続した医療支援、人材育成の柱の一つとなっています。



ドミトリー・ロマノフスキー副所長



甲状腺超音波診断:疾患編(写真・右)
小児甲状腺学(写真・左)

Have a break...

簡単！カザフスタンの料理 「ベシバルマク」

ベシバルマクは、カザフスタンの一般的な大皿料理で食材が揃えばとっても簡単にできる家庭料理です。

材料

1) スープ

- 羊肉 750g
(馬肉1,270gか牛肉1,200gでも可)
 - 玉ねぎ 1個
 - じゃがいも 1個
 - 塩、スパイス(コショウ、黒コショウ)
- <ソース>
- 玉ねぎ 1個
 - ねぎ(万能ねぎ)
 - ブイヨン 100ml(スープの煮汁で可)
 - 塩、コショウ

2) パスタ

- 小麦粉 375g
- 水 70ml
- 卵 2個
- 塩 小さじ1杯

作り方

- 1) 水を入れた鍋に肉を入れ、弱火で沸騰させ灰汁をとりながら2時間くらい煮込み、火からおろす30分前に塩、コショウ、玉ねぎ、黒コショウを入れて味をつけ、じゃがいもを入れる。
- 2) 上の1)を煮込んでいる間にパスタをつくる。
小麦粉と水をまぜて30分くらいねかせ、良くこねて厚さ1~1.5mmにのばし、8cm平方に切る。
- 3) 煮込んだ1)の肉と玉ねぎ、じゃがいもを取り出してスライス。
スープの中にパスタをいれて2~3分茹でる。
大きな皿に茹でたパスタを盛り付け、その上に切った肉、玉ねぎ、じゃがいもを盛り合わせる。
最後にソースをかけて出来上がり。



今回カザフスタン料理「ベシバルマク」の作り方を教えて頂いたのは長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設の病態分子解析研究分野(原研病理)所属のアリポフ・ガビットさんです。ガビットさんは、日本滞在8年で日本語はペラペラですが、やっぱり故郷の味が忘れられないそうです。

第10号
発行 平成14年 3月 29日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
(NASHIM)
TEL 095(823)4278
FAX 095(820)3037
<http://www.nashim.org/>
E-Mail info@nashim.org

Information

NASHIMのH.P.アドレスが変わりました。

この度、独自ドメイン「www.nashim.org」を取得しましたので、ホームページもリニューアルしました。新しい情報、ニュース等はこのページでお知らせしますので、時々このページをチェックして下さい。

<http://www.nashim.org/>
ご意見やご質問はメールでどうぞ。
info@nashim.org

原研 新研究棟が完成

平成13年11月、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設の増改築により新研究棟が完成し、研究の再スタートが切られました。

建物は鉄筋コンクリート造り、地上3階建て、建築面積は3,723㎡で、旧棟の1.5倍、1,328㎡増えました。最新の省エネタイプの設備が多数施されています。旧棟は昭和37年に建設され、すでに30年が経過し、かなり老朽化していました。新棟の完成で職員一同、新しい気分で研究に打ち込んでおり、能率も飛躍的に高まっております。

また、「被爆者医療学術研修センター」という研修室も4階に設けられ、すでに海外から各種研修や内部の会議におおいに利用されております。この研修室の諸設備はNASHIMの財政支援や故 永井誠一氏(永井 隆先生の御長男)の御遺族の御寄付によって整備されました。

原爆被爆や放射線被曝事故等による放射線障害発症機序の分子レベルでの解明と放射線被曝者の遺伝子治療を設置目的とした原研は、放射線ヒバクシャの国際的調査や医療協力事業を含め、今後ますますの活躍が期待されています。さらに今年から始まる在外被爆者支援事業にも参加します。

今後共、皆様のあたたかいご支援のほどをお願い申し上げます。

(原研施設長 朝長 万左男)

今後のNASHIMの事業 (予定)

- ◆チェルノブイリ・セミパラチンスク
関係医師受け入れ研修
14年7月～8月
- ◆日本ベラルーシ友好協会との共同事業
による医師等受け入れ研修
14年8月
- ◆NASHIM 10周年記念事業特別講演会
14年8月4日(長崎原爆資料館ホール)
- ◆カザフスタン共和国へ専門医師等派遣
14年9月
- ◆韓国医師等受け入れ研修
14年11月

こうしたNASHIMが行う事業については、次号で詳しく紹介・報告いたします。

Nagasaki
Association
for
Hibakushas'
Medical Care



長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設新研究棟



共同カンファランス室

HPでも詳しく紹介しています。

<http://abomb.med.nagasaki-u.ac.jp/index-sjis.html>

編集後記

セミパラチンスクへの訪問団一行が9月に無事帰国したのは、アメリカでの同時多発テロ直前のことでした。帰国がほんのすこし遅れていたら、影響を受けていたに違いありません。

またそれ以降の世界の動き、核兵器や核開発に関する各国の姿勢や反応には多くの事を考えさせられました。

これから私達にできることは何かを改めて考えた時、「長崎から世界へ」というナシムの情報発信がさらに大きな意味を持つようになるのではないのでしょうか。